

1 成長期顎骨の実験的骨粗鬆症に対する高カルシウム食と活性型VD₃の影響(第1報)

— とくに下顎頭の変化 —

○高野 治、木村光孝

九歯大・小児歯

健康人の骨組織は、骨吸収と骨形成による remodeling が常に行われ、両者の均衡が保たれているために骨量は一定に維持されている。しかし、Osteoporosisにおいては骨形成における均衡が破綻をきたし、骨量の減少を惹起するために多種多様な変化を呈す。治療法としては高蛋白食、ビタミンに富んだ食餌のほか、活性型VD₃やカルチトニンなどの投与も行われ、ある程度の効果が報告されている。

しかし、いまだ確立された治療法はないようである。当教室ではOsteoporosisに関して一連の研究を行っているが、すべて単独療法による研究である。そこで今回演者らは食餌の改善と化学物質を応用し虚弱下顎頭に及ぼす影響を検索しているので報告する。

〔研究材料ならびに方法〕

生後3週齢のWistar系雄ラットを6群に分けた。1) 正常食対照群、2) Ca欠乏食群、3) Ca欠乏食・正常食群、4) Ca欠乏食・混合食(正常食2とイワシパウダー1の混合)群、5) カルシウム欠乏食・正常食・活性型VD₃群、6) カルシウム欠乏食・混合食・活性型VD₃群

Ca欠乏食で3週間飼育後、正常食群、混合食群、活性型VD₃群にきりかえて2週間飼育した。

〔観察項目〕

体重、X線写真、病理組織所見(非脱灰標本ならびに脱灰標本)、X線マイクロアナライザーによるCaとPの分析、下顎頭破砕試験および血液検査について行った。

〔結果〕

虚弱状態に陥った下顎頭は高カルシウムを含有した食事療法の改善を行い、さらに活性型VD₃の同時投与を行うことにより骨形成における骨構築が促進された。

2 第一大臼歯の萌出異常に関する臨床所見

○國武哲治、二木昌人、松本敏秀、

中田 稔

九大・歯・小児歯

第一大臼歯は咬合の鍵と呼ばれ、永久歯咬合の形態と機能に果たす役割はきわめて重要である。しかし小児歯科臨床においては、しばしば第一大臼歯の萌出異常、すなわち片側あるいは片側の著しい萌出遅延等に遭遇することがある。永久歯列の健全な咬合状態が形成される過程で、これらの異常により、将来なんらかの障害をきたすことが考えられる。

しかしながら、それらの発現頻度やその処置方針についての基準となる報告や分類がないのが現状である。そこで今回、我々は本学小児歯科外来を受診したすべての患者の中から、全体的には健常と思われる小児について、オルソパントモグラフィによるX線像に基づく歯の萌出に関する調査を行い、特に第一大臼歯の萌出状態について検討を行なった。すなわち、X線フィルム上で第二乳臼歯の遠心部に対する第一大臼歯の咬合面の高さを定性的に評価し、これを相対的萌出度として数値化を試みた。これにより、暦齢と萌出度との関係を調べ、その中で本集団の平均値より有意差をもって萌出が遅れている場合を萌出遅延と判定して抽出した。これらの症例を性別、部位別、石灰化の遅れの有無などによって分類し、またその頻度についても調査した。さらに、これらの症例の中で経過観察期間中に萌出の見られた歯については、大きさ、形態等も検索した。

その結果、興味ある知見を得たので、報告する。